

[100] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10166>

出版情報：語文研究. 100/101, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

飯倉洋一 著

『秋成考』

現今の上田秋成研究を牽引する著者が、各誌に発表した秋成研究の成果を取りまとめ、再構成して発刊したのが本書である。内容は、各論の題名、すなわち以下に引く構成において、他ならぬ著者自身の言葉で、過不足なく示される。

第一章 ことばと歴史―秋成の言説世界―

第一節 秋成における「自然」の問題／第二節 秋成における「憤り」の問題―『春雨物語』への一視点―／第三節 秋成と分度―『安々言』試論―／第四節 秋成と天覧―『神代がたり』試論―／第五節 『呵刈葎』上篇と宗武・宇万伎の「仮字問答」／第五節付論 宇万伎の古道論

第二章 和文と物語―秋成の表現方法―

第一節 和文の思想―雅俗論の視点―／第二節 隠された地名―『浅茅が宿』作中歌補注―／第三節 傍注の思想―『ぬば玉の巻』論―／第四節 「めめしさ」の意味するもの―『秋山記』試論―／第五節 伏在する中古物語／第六節 小品物語の世界―『月の前』『剣の舞』『駕央行』『背振翁伝』など―／第七節 『文反古』の成立―稿本から刊本へ―

第三章 『春雨物語』論の可能性

第一節 「長物がたり」の系譜―『春雨物語』論のために―／第二節 『春雨物語』序文考／第三節 「血かたびら」の文体／「血かたびら」の語りについて／第五節 語りと命祿―「天津処女」試論―／第六節 「海賊」考／第七節 老曾の森の物語―「目ひとつの神」私見―／第八節 いぶかしき世のさま―「二世の縁」私見―

いたずらに時代と切り離して論じられがちな秋成の言説を、当代の思想的文脈コンテクストに基づいて考察し、また「和文」「語り」等の秋成の表現方法に着目して分析を試みる斬新な一書である。巻末に索引を付す。

(平成十七年二月 翰林書房 A5版 三九四頁 八、〇〇〇円)

花田俊典 著

『坂口安吾生成』

本書は、故花田俊典氏が博士論文として書き溜めていたものを、石川巧助教授（現立教大学教授）が中心となつてまとめ上げ、刊行された。章立ては以下の通り。

プロローグ―五十歩の距離―

ファルスの登場／笑劇の季節、あるいは蛸博士の二重身／
「風博士」解説、あるいは蛸博士の奸計／坂口安吾の翻訳／
ファルスの可能性と限界

安吾・姪・松之山／松之山の村上真雄の事など／黒谷村幻視
行

安吾文学と矢田津世子／続安吾文学と矢田津世子／続々安吾
文学と矢田津世子

「牧野さんの死」雑見／「吹雪物語」叙説／信の領分／「ふ
るさと」への回帰／超人と常人のあいだ／悲願について

「白痴」の位置／「白痴」評釈／健康な肉体の発見／肉
体のゆくえ／女語り の採用／天性の娼婦、現身の美千
代／坂口安吾のディコンストラクション
エピソード―戦っていれば負けないのです―

(平成十七年六月 白地社 A5判 五七六頁 一〇、〇〇〇円)

中野三敏・宗像和重・十川信介・関肇 校注

『風刺文学集』

(新日本古典文学大系 明治編29)

本書は明治中期に発表された、風刺作品として広く知られ
る七作品、すなわち饗庭篁村『当世商人気質』、斎藤緑雨
『かくれんぼ』・『あま蛙』・『小説評註問答』・『眼前口頭』、瘦々
亭骨皮道人『浮世写真 百人百色』(抄)、内田魯庵『文学者
となる法』を収め、巻末に付録として、斎藤緑雨『かくれん
ぼ』の来歴と趣意を語った作者談話を収録。また、補注と以
下四編の解説を付す。

饗庭篁村(肥田皓三)

斎藤緑雨の「江戸式」をめぐる(宗像和重)

三文字屋金平の登場まで(十川信介)

「文学者となる法」と明治二十年代の出版文化(関肇)

(平成十七年十月 岩波書店 A5判 五二〇頁 六、〇九〇円)

棚町知彌・橋本政宣 編

『社家文事の地域史』

本書は、社家の文事に焦点をあて、とりわけ和歌に関する

論考を多く収載しており、その多くは平成十四年九月の神社史料研究会において発表されたものである。構成と執筆者は次のとおり。

はじめに(棚町知彌・橋本政宣)

『守武千句』の時代——「跋文」の新解釈—— 井上敏幸

中西信慶の歌事——『愚詠草稿』について—— 神作研一

伊藤栄治・永雲のこと——江戸前期島原藩における神事の周辺—— 川平敏文

中島広足と本居宣長——『後の歌がたり』に見られる宣長批判—— 吉良史明

伊勢御師の歌道入門——名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫所蔵『藤谷家御教訓』翻刻と解題—— 加藤弓枝

北野宮仕(中)という歌学専門集団の組織と運営の実態(資料編)——小松へ流出した頭脳・能順「伝」の基底として—— 棚町知彌

北野社家における歌道添削について——香川景樹門 松園坊清根の詠草を中心に—— 菊池明範

近世における地方神主の文事——越前鯖江の舟津神社神主橋本政宣を中心に—— 橋本政宣

刊本『さくぐり』の成立——長崎檀園社中の台頭—— 吉良史明

連歌御由緒考——山田通孝に至るまで—— 入口敦志

あとがき(橋本政宣)

本書の前五編は、伊勢社家との関連を論じたもの、後半は

各社家における文事の実態を明らかにする論考である。

(平成十七年十一月 思文閣出版 A5判 三六四頁 七、五〇〇円)

今井源衛 著

『今井源衛著作集第八巻』

漢詩文と平安朝文学

本巻は漢詩文についての論考が収められている。構成は以下の通りである。

平安朝の文学／漢文伝の世界／漢文伝についての一問題——『類聚国史』「人」部／発生期の漢文伝小考／撰閑制と漢文学・末期の漢文学／平安朝の物語と漢詩文／源氏物語における漢詩文の位置／源氏物語と漢文学／源氏物語の形成——帚木巻頭をめぐる／須磨巻の三月上巳の異変——王範妾と太字鄭生／平安朝漢詩文と白楽天／かくや姫の面影——姮娥と少女と／「老閑行」のこと／平安宮廷の裸踊り／菅公と源氏物語／菅公の故事と源氏物語古注／菅公伝説と源氏物語／白楽天の自嘲詩と平安文学／橋直幹略伝／勘解由相公藤原有国伝——家司層文人の生涯／桜島忠信の落書／『本朝文粹』とのつきあい／漢字文化圏における日本古代文学研究の諸問題——「源氏物語」に即して／平安朝漢文学総

合索引 跋文

上記の論考のうち『菅公の故事と源氏物語古注』は中世における光源氏の菅公準抛論の当否を探るべく「須磨」「明石」の両巻より『河海抄』『原中最秘抄』、異本『紫明抄』『弄花抄』などに引用される、光源氏の行動や和歌や漢詩に付けられた注十三箇所を抜き出し、そこに引かれる『菅家文章』、『大鏡』の和歌などが適当かどうか検討がされている。さらに、この漢詩文関係の論考には『本朝文粹』に関するものも収められている。

(平成十七年十一月 笠間書院 A5判 三四二頁 一一、五五〇円)

上野洋三 著

『芭蕉の表現』(岩波現代文庫)

目次は以下の通り。

第一部 芭蕉案内

蕉風俳諧の成立／蕉風の表現と方法／紀行と俳文／芭蕉以降

第二部 発句の評唱

も考／時雨考／ひとつ考／世間との距離／寫と蛙／晩年の自在

第三部 『奥の細道』論

前後の対照について——『奥の細道』の構成／人物の形象に

ついて——『奥の細道』の構成／芭蕉の恋——『奥の細道』の構造／曾良を送る——『奥の細道』の構造／旅日記の曾良 巻末に芭蕉発句索引を付す。

なお、本書は、第一部は『日本文芸史』第四巻「近世」の第二章「芭蕉」(河出書房新社、一九八八年)、第二部・第三部は『芭蕉論』(筑摩書房、初版一九八六年、新装版一九九五年)の第一部・第二部を、新たに編纂したものである。

(平成十七年十一月 岩波書店 文庫判 三四四頁 一、二〇〇円)

雅俗の会 編・中野三敏 監修

(川平敏文・大庭卓也責任編集)

『中野三敏先生古希記念資料集 雅俗文叢』

本書「はじめに」にあるとおり、監修者が多年研究してきた近世中期の人物のなかで、これ迄は殆ど埋もれ、比較的流布する事の少なかった十九人の未翻刻の著述二十七点を、監修者の古希の慶事を記念して、ゆかりのある者が集い翻印し資料集としてまとめたものである。監修者が『近世新奇人伝』で紹介した人物とおおむね重なるよう配慮されている。

書名は、監修者を中心に発足した研究会「雅俗の会」、そして、その同人誌『雅俗』とも重なり、近世中期を「雅俗融

和」の時代と表現し、最も「江戸らしい時代」とされてきた
監修者の古希を祝うに相応しい、『雅俗』を冠する古希記念
資料集である。

細目は、以下の通り。

闇礫 増穂残口／斉物論 佚齋樗山／元無草 志道軒／可
笑穴物語弁談 同／梅花林藪漫談 寺町百庵／華葉集 同
／庖瘡禁厭秘伝集 静観房好阿／花鳥確蓮坊 自墮落先生
／獅窟詩画 佚山黙隱／羅漢寺題詠集 同／詩範 井上蘭
台／白藤伝 同／金鑰論 大我／道染菴夜話 金龍道人敬
雄／三元彩毫 同／泉居評草廬文集 龍 草廬／草庵稿
蘭陵越宗／推公施政 天愚孔平／荒河管説 同／摺参捷徑
同／蘇門文鈔附放言 服部蘇門／示蒙抄 山岡浚明／天真
坤元靈符伝 大江文坡／迷処邪正案内 沢田東江／連々呼
式 土卵／誠哉集 同／竹田百瓶 龜齡軒斗遠

(平成十七年十二月 汲古書院 B6判 七七六頁 二〇、〇〇〇円)

日下幸男・上野洋三・神作研一 校注

『資慶卿口授・和歌聞書・等義聞書』

(歌論歌学集成第十四卷)

本書は近世の歌学書・歌論書三編を収める。書名と校注者

は次の通り。

資慶卿口授 日下幸男

和歌聞書 上野洋三

等義聞書 神作研一

『資慶卿口授』は、岡西惟中が、烏丸資慶の教えを書き留
めたものである。

上野氏担当の『和歌聞書』は、三条西実教の指導するところ
を、正親町実豊が記録したもの。実教の和歌論の根本は、人
心および万物の本源である「実」を土台にして出発するが、
詠作の技法としては、趣向・詞・風体の三要素を理想的に配
合したものをよしとする。その基本理念が、独特のたとえや
時に峻烈な口調によって縦横に語られている。記録者実豊の
娘は、柳沢吉保の側室となった町子。実教の薫陶を受けてな
された実豊の歌学の習練は、『松蔭日記』の誕生に、はるか
に効果が及んだのである。

『等義聞書』は、清水谷実業述歌論書の一つ。中川等義の
記録による。

なお、巻末には参考として、聞書者を異にする『清水谷大
納言実業卿対顔』の一部が収録されており、実業の学の全貌
を窺い知る一助となっている。

(平成十七年十二月 三弥井書店 A5判 二六〇頁 七、五六〇円)

崎村弘文 著

『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』

本書は、著者の行ってきた琉球地方と九州西南部地方の方言に関する長年の研究をまとめたものである。本書の構成は、以下のとおり。

第一部 総論篇

第二部 琉球方言篇

第三部 九州方言篇

第四部 綜合篇

総論篇及び綜合篇で述べられているように、本書は、東アジアとの関わりの中で、日本の諸方言音調の韻律的位置付けを行った早田輝洋のアクセント分布地図―日本語諸方言を韻律論的に 語声調 方言・狭義のアクセント 方言ならびに 語声調・アクセント 方言ならびに無型音調方言に分ける―に触発された著者が、その地図に示されている 語声調 方言地域のうち、特に琉球・九州に分布するものについて、従来の調査結果に加え、著者が新たに実地調査を行い、その韻律的解釈に再検討を加えたものである。果たして、結果は地図から推定されたとおりであったとし、琉球諸方言はほぼ全て語声調方言であり、また九州西岸の（語声調方言の）2型音調は、シラビームを韻律単位とする3型 同2型 モーラを韻律単位とする2型へと変遷したとする。

（平成十八年二月 明治書院 A5判 四八一頁 一三、六五〇円）

江口泰生 著

『ロシア資料による日本語研究』

本書は、著者が約十七年間のうちに発表した論文を纏めたものである。「日本語を形態音韻論的観点から明らかにする」という目標の一部分であり、特に近世篇として構想していたもの」であるとしている。本書は、十八世紀薩隅方言を反映すると言われるロシア資料を通して言語が絶え間なく姿を変えてゆくさまのひとつの側面を明らかにした。著者の研究成果である本書は、二部から構成されている。

部 ロシア資料資料論（§1ロシア資料沿革／§2研究史補遺／§3表記論／§4「外国資料」としての『露日単語集』／§5「外国資料」としての『友好会話手本集』／§6「外国資料」としての『世界図絵』）

部 「簡単な報告」中の日本語
部 ロシア資料形態音韻論（§1母音の脱落・無声化と境界表示／§2助詞の撥音化／§3助詞の融合と文節形成／§4促音と撥音の音価／§5ロシア資料の工列音／§6アイ連母音の工列化と語種類別／§7語幹保持の諸相／§8ロシア資料からみた18世紀初頭薩隅方言）

部では、ロシア資料の性格を「外国資料」という点から考察し、各資料ごとに詳細に分析している。部では、資料に現れる音韻現象をつぶさに調査した成果が収められている。

(平成十八年二月 和泉書院 A5判 三三〇頁 一〇、五〇〇円)

今井源衛 著

『今井源衛著作集第十一巻』

王朝末期の物語

本巻は、『王朝末期物語論』(昭和61年 桜楓社)を解体、増補、再構成するかたちで編集されたものである。旧著からの最も大きな変更は、三谷栄一氏との共編『鑑賞日本古典文学 第12巻 堤中納言物語・とりかへばや物語』(昭和51年 角川書店)における担当であった『とりかへばや物語』を、一括して後半部に収めた点である。細目は次の通り。

王朝末期の物語

王朝物語の終焉／王朝末期物語／讃岐典侍日記／とりかへばや物語解説／とりかへばや／とりかへばや／醜穢論をめぐって／とりかへばや物語／我身にたどる姫君 梗概／我身にたどる姫君 概説／我身にたどる姫君 の性愛描写／我身にたどる姫君 のユ-

モア／我身にたどる姫君 本文の再建／我身にたどる姫君 卷六の成立／『苔の衣』の性／『苔の衣』梗概／『苔の衣』 解題／やへむくら解題
とりかへばや物語

総説／あらずじ／第一章 発端／第二章 心づくしの影／第三章 夏の夜の心まどい／第四章 宇治の隠れ家／第五章 思いのほかの三途の川／第六章 大尾

(平成十八年二月 笠間書院 A5判 四五一頁 一四、七〇〇円)

学海余滴研究会(代表 今井源衛・松本常彦) 編纂

依田学海 『学海余滴』

本書は、無窮会平沼文庫蔵の写本『学海翁余滴 七冊』を底本とし、今井源衛氏を中心とする研究会により翻字、編纂された。学海については、すでに今井氏による『墨水別墅雑録』(吉川弘文館・昭和六十二)・『学海日録』十二巻(岩波書店・平成二丁五)が上梓され、それらによって、研究が飛躍的に進んだ。と同時に、学海の地元佐倉でも顕彰の機運が高まり、『依田学海作品集』(『依田学海』作品刊行会・平成六年)が出版されている。随筆中、『譚海』や『談叢』は広く知られているが、本書は、未刊の学海随筆の一。

七冊の概要は、明治二十二年から二十四年の新聞記事の抄出（第一冊）、明治三十年から三十二年の間に旅先で訪れた土地に伝わる口碑や古文書などの史料の覚書（第二、三冊）、明治二十二年五月頃から稿を起した佐倉藩主堀田家歴代の公世記録（第四冊以降）である。「解説」（高橋昌彦氏執筆）には、「余滴」の第四冊以降の文章が平野重久「佐倉藩雜史」（明治十四年脱稿）を参考にしたこと、また熊田葦城「佐倉史談」（良書刊行会・大正六年）が「余滴」を利用した可能性などが指摘されている。付け加えるならば、「余滴」第4冊以降は、『堀田家文書』に収められている「佐倉藩記」の、謂わばダイジェスト版という性格も持ち合わせている。巻末には人名索引を付す。

（平成十八年三月 笠間書院 B 6判 五六五頁 六、〇九〇円）

後藤昭雄 著

人物叢書 『大江匡衡』

大江匡衡（九五丁一〇二二）は平安時代中期の文人、多くの優れた漢詩文を残し、詩集『江吏部集』が伝わる。本書の構成は以下の通り。
はじめに

第一 稽古の力

一 誕生とその時代 / 二 少年期
三 大学での修学 / 四 赤染衛門との結婚

第二 帝王の師範

一 官途に就く / 二 文章博士 / 三 帝師として

第三 学統の継承

一 尾張赴任 / 二 京へ帰任 / 三 再び尾張へ

四 丹波守への遷任と死 / 五 詩文と和歌

六 子供たち

人と文学

大江氏（高階氏）略系図 / 藤原氏略系図 / 略年譜

「第一 稽古の力」では誕生から赤染衛門との結婚までが、「第二 帝王の師範」では文人官僚としての活躍期、任官から天皇の侍読に至るまでが描かれる。「第三 学統の継承」では、尾張・丹波の国守を歴任した晩年が描かれ、「人と文学」では大江匡衡が文人として、当時人の目にどのように映っていたかが語られる。

（平成十八年三月 吉川弘文館 B 6判 二二八頁 一、八九〇円）